

2024年度 修士課程 秋季 国文学専攻 専門【出題意図】

「中古文学」

[設問一]

①②平安時代に成立した作品に関する基礎的な知識を有しているかを問う。

[設問二]

①本文内容を理解し、描写の特徴を適切に説明できるかを問う。空間の広がりや色彩、光彩といった視覚描写を中心に叙述されていること、それに聴覚描写が重なることを、本文中の具体的な語句を示しながら説明できるのが望ましい。

②和歌の現代語訳を通じて、古文単語、文法、和歌の修辞等の基礎知識が身についているかを問う。

[設問三]

平安時代の文学史について、その概要を適切に叙述できるかを問う。キーワードである「かな文字」、「宮仕え」、「自照」から、和文の成立や女性作者の活躍、日記(的)文学の成立に関する記述を導き、「歴史物語」、「説話」を含む諸ジャンルとあわせて、その成立と展開、相互関係等を、具体的な作品名や作者名を示しながら説明できるかどうかを確認する。

2024年度 修士課程 秋季 国文学専攻 専門【出題意図】

「中世文学」

I 御伽草子のいわゆる『浦島太郎』の、末尾の部分について、渋川版本と日本民芸館本を比較し、どのような違いがあるか、またそのことによって、それぞれの伝本はどのような話として理解できるかを問う問題である。古文の基本的な読解力を問うとともに、中世文学に多い、説話の基本的な性質が理解できているかを問うものである。とくに両伝本の違いは、その結末に大きな違いがあり、結末がどう描かれるかによって、それがこの物語をどのような物語として成立させられているかを大きく左右している。そこを読み取れるかどうかは、説話の話末評語が違うことによって、その説話がどのようなことを説示する物語として提示されているかを読み取れるかと同等のものであり、中世の説話のみならず、『今鏡』などの歴史物語、『平家物語』などの軍記物語など、説話を素材とする文学の読解にも不可欠な力である。

II 中世文学を代表する文学作品についての基礎的な知識を問う問題である。

一、『方丈記』の冒頭を理解しているか。また、同書の作者、成立年代、内容、その他特筆すべき事柄などについて問う問題。

二、『徒然草』の著名な章段である第百三十七段の冒頭を理解しているか。同書の作者、成立年代、内容、その他特筆すべき事柄などについて問う問題。

三、『平家物語』の冒頭を理解しているか。同書の作者や成立年代、内容、その他特筆すべき事柄などについて問う問題。

2024年度 修士課程 秋季 国文学専攻 専門【出題意図】

「近現代文学」

問Ⅰ

作品分析の基本となる語り（語り手）の概念をどれだけ理解しているかを確認するために、夏目漱石「夢十夜」の第五夜を問題文とし、具体的な分析考察を求めた。

「夢十夜」の第五夜では、「自分」という一人称の語り手が語っている。一人称の語りの場合、原理的には語り手が知っていることや見聞きしているものしか語ることはできないはずである。しかし、第五夜の冒頭では、「神代に近い昔」の人は「みんな脊が高かった」という、語り手が到底知り得ないはずの情報が当たり前のように語られている。また、「自分」は戦に敗けて「生擒」になっているのにもかかわらず、「思う女」がどこかで「白い馬を引き出し」、それに乗ってこちらまで駆けてくる様子を、あたかも「自分」で直接見ているかのように描写している部分がある。

登場人物が三人称で語られる、いわゆる〈神の視点〉からの語りであれば、このような語り方でも原理的に問題はないが、一人称の語り手が語る作品としては、語りの原理と語られる内容の間で不均衡を起こしている。

解答としては、作中の上記部分に注目し、なおかつ語りに対する違和感や印象の表明ではなく、語りの原理を踏まえたうえで矛盾を論理的に説明することが重要である。

問Ⅱ

大学院に進学するうえで、常識的なレベルの文学史的知識を知っていることは当然である。この問題では、敗戦直後という日本社会が混乱していた時期に登場した文学潮流について、「代表的な作家・作品に言及しながら」説明することを求めた。

この時期にもっとも活躍したのは、太宰治・坂口安吾・織田作之助・石川淳ら無頼派（新戯作派）と呼ばれる作家たちである。無頼派は既成の秩序やモラルに反発し、手法としては自然主義的なリアリズムに飽き足らず、新しい文学を追究した。いずれも戦前にデビューしているが、太宰は『斜陽』や『人間失格』で敗戦による社会の変化の中で自己をどのように位置づけるのかを模索し、安吾は『堕落論』で「堕落」しきれない人間の弱さを見据え、戦後の荒廃した世相を背景に流行作家となった。石川は『焼跡のイエス』で、上野の闇市を舞台に、主人公が薄汚い少年にイエスの顔を見るという超越的体験をダイナミックに描いた。

無頼派より年少世代で、軍隊経験とマルクス主義からの転向体験を経て戦後の文壇に新しく登場した戦後派も重要である。『暗い絵』の野間宏、『桜島』の梅崎春生、『俘虜記』の大岡昇平らは作風は異なるが、無頼派と同じく、やはり既成のリアリズムを否定した新しい文学の形を追究した。

2024年度 修士課程 秋季 国文学専攻 専門【出題意図】

「現代文化」

設問1(1)解答例： 該当箇所では、ある情報に裏情報や裏話がついて回ることを情報の「多層化」と呼んでいる。情報の「多層化」が起こることにより、個々の物語を裏打ちする理念や規範は相対化される。これが繰り返されることにより、個々の物語を通して再構築される「大きな物語」も脱神話化され、その力は衰弱するということである。

(2)出題意図： 文脈から、ここで言われる「現実」の構成過程を把握し、個々の物語が「現実化」する／しないを左右する権力の作用を意識して具体例を挙げることができるかどうかを評価する。先行研究の議論を応用できる力を問うために出題した。

設問2 出題意図： 現代文化の研究は、日本文学専攻であっても国際的な視野に立つことが重要である。とくに日本で創作された様々な現代的表現が、グローバル文化(産業)状況の中でどのような状況に置かれているかを知っていることは、大学院進学後の研究活動をスムーズにスタートさせるうえで必要である。そのため、設問2を出題した。